

編集後記

編集長(ダン シロウ)

◆24冊、6年目が終了する。40人程の連載執筆者に支えられて、マガジンはますます成長気流だ。長期連載が一区切りする方、リニューアルで開始する方、新規の参入者。当然の継続発展の姿が現れ始めている。

こんな事態を作り出せている背景としては、ITインフラの整備が一番大きい。だが、ペンを持ったら誰もが小説家になれるわけではないと同様、IT環境が整備されたからといって、自動的にこんな事が出来るわけでもない。やりたいと思っていた者にとって、好都合な時代になっただけのことである。

一方、手段が引き出すモチベーションもあって、アメリカ社会の度重なる銃乱射事件も、ネットに溢れるヘイトスピーチ、誹謗中傷もこの現れだろう。簡単に手段が手にはいることで、行動が誘発される。

結局のところ、あなたは何をするのか？はいつの時代にも問われている。私達は多くの場合、今自分のしていることは何となく分かっているが、十年後にそれがどのような意味を持つのか、持たないのか等まるで知らない。

だから今自分のしていることが、ある意味ですべてである。今できない者はずっとしないのだろう。なぜなら時間はいつも、今の連続だからである。「明日から始める」と言う人の明日は永遠に明日である。

今日、今、何をするか、何をしているのかが問われているのだと覚悟すれば、世界は分かりやすい。予言や占いにかまけているヒマなどない。寿命の有限は誰に解説されるまでもない。今日、今が晩年であったことを知るの、

死んでからのことだ。

井 今号からの新連載は、川崎二三彦「S.V.羅針盤のない航海」。児童相談関係の人には待望の開始だろう。それに伴い、「映画の中の子どもたち」は不定期連載化されるらしい。

井 そして、新しい執筆者「奥野景子」の連載決意表明文も、執筆者短信の末尾に掲載した。

更に次号第25号から、他にも新連載の予定が複数ある。ますますの活況ということになるだろう。

b また今号では2冊、本誌連載にゆかりの新刊書の告知がされている。

「10代の母という生き方」

大川聡子著(晃洋書房)

「対人援助職のための

ジェノグラム入門」

早樫一男著(中央法規出版)

詳細は執筆者短信、本文をご覧ください。

編集員(チバ アキオ)

正規雇用になりたい！という願いを持って、活動をしている方に出会うことが増えた。ニュースになっているように、今後も正規雇用が増えるという状況はしばらくなさそうである。

対人援助の質を確保するために資格をつくるということを経年われわれの領域では行ってきた。その資格も、公務員法との兼ね合いで業務独占にはならず、名称独占で進められてきた。その結果、資格を持って援助職をしている人と、資格を持っていないけれど支援をしている人がいるという状況になっている。

資格を持つことが一定、サービスの質を保証する、いわゆる保証付きの証しであった。ところがこれには前提があったのではないかと思う。「労働条件は同じ」という前提で！というものである。現在、援助職の募集もご多分に漏れず「非常勤」「期限付き常勤的雇用」「人材会社からの派遣」…という文字だらけ。その結果、さまざまな話題が聞こえて来る。

経験が積みあがらない、収入が少なく不安定なので自己研鑽のための研修費用に充てるお金がない、私は常勤ではないからこそまでの仕事で充分でそれ以上やると損だ、常勤の人がそこまでしかやらないのに私がやる必要があるのか、常勤がろくに内容もわかっていないし自分より経験も少なくそんな人に使われたくない等々。

これからは援助職がどんな資格を持っているかでは支援の質の保証にならないのではないか？むしろ確認すべきなのは援助職の労働条件ではないか。きちんとした労働環境を提供している職場は、職場が持つ支援に関する考え方もきちんと持っていることが多い。短期間で人が替わるということが対人援助においてどういう影響をもたらすのか？ということがわかっているのかが見えてくる。

そして資格という商品は、非常勤ではなく常勤になれる可能性が高まりますよ！と労働環境の不安をあおり、援助職を消費者にしていく。いわば、労働の不安と資格という商品は対になっているといえる。むしろ、労働環境の不安をベースに資格はなりたっているともいえるのである。

利用者のためにという資格も、利用者の方を向いているようで、実際は自分の懐をみているといわれてもしょうがない。…これらは私が感じているこの業界のある一側面である。もちろん、これがすべてではない。ただ、「資格」云々という尺度だけでサービスをはかるのではなく、その他の視点からもサービスを観てほしいし、観ることができるようになるといいと

考えている。

そのためには援助の現場等の生の状況を知ることができないといけない。現場ごとに公式な発信だけでは不十分なことは明らかである。守秘義務もあるし、組織の発信の意図も絡んでくる。このマガジンではそのチャンネルではないところからの発信である。私体験に価値があることは昨今の援助モデル、ナラティブ視点を持ち出すまでもなく明らかである。われわれの社会は私体験で構成されている。援助者と被援助者で成り立っているわけではない。保育所に入れないけど、一方で保育士の労働条件が悪く、なり手がない。

高齢者施設に入りたいけど、一方で援助職の労働条件が悪く、なり手がない。

公式な見解だけ、業界のしがらみに引っ張られたものだけ、資格ムラの情報にひっぱられたものだけが世にあふれる。おいっ！それだけではないですよ！！！！っていうのが対人援助学マガジンです。安心して下さい！書いてますよ！

編集員 オオタニタカシ

ここ 1~2 カ月、学会誌に投稿する論文と格闘していた。締切日に無事提出できたものの、部屋には校正途中の原稿や資料が山のようになり、その処分にそこそこの時間を要した。考えてみると、対人援助学マガジンの執筆時にこのようなことはない。ページ数が 5~10 ページくらいであれば、紙に印刷しなくても何とか全容の把握ができることもあり、途中で原稿の印刷をしていないからだ。後始末に手を取られない、これもペーパーフリーの利点だ。書き終わると、何かを処分したりすることなく、先に進める。バックナンバーなど、以前の資料を見返すのは Web 上ですぐにできる。できたものはしっかり形に残しつつ、重しにはせず次へ次へ。このようなフットワークの軽さ、私は好きです。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻24号

第6巻 第四号
2016年3月15日発行
<http://humanservices.jp/>

第25号は2016年6月15日

発刊の予定です。

原稿締切2016年5月25日！

新規執筆者を常に募っています。連載誌ですが、必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数、書いていただけるよう設定しています。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

一時期、砂漠漫画を多量に描いていた。漫画展にもそんなものばかり展示した。岡田隆介著「家族の法則」の装画を依頼されたときもまだ、そんな名残があって砂漠漫画を描いた。

砂漠に魅了されたのは映画「アラビアのロレンス」の1シーンである。マッチの火を吹き消すと、いきなり砂の地平線が現れる。一生忘れられないなあと思うほど、この映像編集に感動した。

映画「イングリッシュ ペイシエント」の冒頭の砂漠も忘れられない。もっともこちらはひ弱な都会人の憧れの表れだろうから、せいぜいバンカーショットで、砂と戯れているくらいが関の山だったのかもしれない。

サンドプレイというのは私の業界では箱庭療法なのだが、夕陽の砂漠を作った子には会ったことがない。

私は子どもが帰った後、片づけの済んだ箱庭に、砂紋を描いて、遠くに夕陽を眺めるかのようなファンタジーに浸ったことがあることを告白する。

2015/02/27 団士郎